〈特集　郷土の歴史再発見〉

富山の洋風建築を探る

富山県内の洋風建築と言えば、赤レンガの銀行として知られる富山銀行本店（高岡市守山町）が有名だが、明治時代～大正初期に建てられた富山県庁、県会議事堂、富山市役所、富山市立図書館、県立薬学専門学校なども洋風建築だった。今回は、それらの建物と歴史的背景について探ってみたい。

居留地建築とお雇い外国人

「ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 富山」（㈱国書刊行会 八尾正治編）には、明治時代に建てられた洋風の富山県庁、県会議事堂、富山市役所、富山市立図書館などの貴重な写真が掲載されている。

昨今、明治時代の建築物の評価が高まっており、こうしたものが残っていたら…と残念な気持ちになる方も多いだろう。

富山の洋風建築について探る前に、まず、日本全体の流れからみていこう。

１８５３年、アメリカのペリー率いる黒船が浦賀に来航。翌年、日米和親条約が結ばれ、下田（現在の静岡県下田市）、箱館（現在の函館）が開港、鎖国が幕を閉じた。１８５８年、日米修好通商条約が結ばれ、神奈川、長崎、箱館、新潟、兵庫の５港の開港が決まった（下田は閉鎖）。江戸幕府は、神奈川宿・神奈川湊は東海道に直結することから、対岸の半農半漁の寒村・横浜村に開港場を新設した。また、兵庫は古くからの港町として栄えていたが、数キロ東の農村・神戸村での開港となった。

高岡山町筋の富山銀行本店（大正３年12月建築）

開港により、貿易のために外国人が商売をし、居住する「居留地」が作られることとなった。

横浜についてみてみると、幕府は横浜への出店を奨励する御触を出し、三井組などの江戸の大商人や全国から一旗あげようとする山師的な冒険投機商とともに、膨大な建設工事需要のため、多くの棟梁や職人が集まった。また、外国人建築家・技術者も多数集まった。こうした中で棟梁・職人たちは洋風建築を学んでいった。横浜はそのための最適の地であった。

その後、大政奉還があり、王制復古の大号令により、明治新政府が発足。１８６８年に示された「五箇条の御誓文」では、合議体制、官民一体での国家形成、旧習の打破、世界列国と伍する実力の涵養が明文化され、「富国強兵」「殖産興業」のスローガンが頻繁に用いられた。

１８７１年から１８７３年かけ、岩倉具視を正使として政府のトップや留学生ら総勢１０７名で構成された岩倉使節団が、アメリカ合衆国、ヨーロッパ（イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、オーストリア、イタリア、スイス）を訪問。直に西洋文明や思想に触れて帰国した。

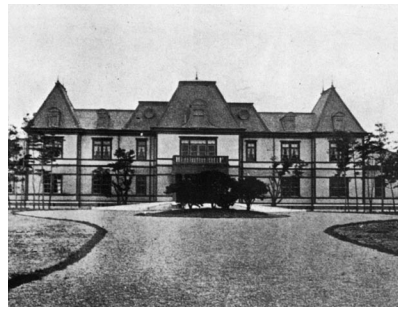
日本人建築家が育つ

この結果、政治、軍隊とともに、交通、建築、服装、食事、教育、など、あらゆるものが西洋式に切り替えられた。公共の建物はすべて西洋式にというのが明治新政府の方針だった。中央の主要官庁や重要な建物は、外国人のお雇い建築家やその指導のもとで育った少数の日本人建築家に任せられた。

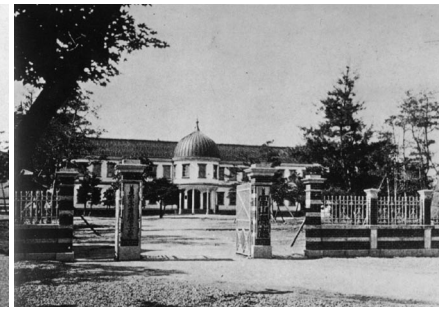
１８７１年、明治初期に殖産興

越中人と西洋建築　清水組の横浜での成功

新開地・横浜の建設工事に関係して、成功した越中人がいる。清水組（現・清水建設）をおこした初代と２代の清水喜助だ。初代の清水喜助は、越中国婦負郡小羽村（現・富山市小羽）の農家に生まれたが、20歳前後で青雲の志を抱いて江戸に向かい、途中宇都宮に立寄り日光東照宮の修営工事に加わった。江戸に上ってからは神田鍛冶町で大工を開業した。２代清水喜助は越中国井波の小間物商の次男で、名を清七といった。彼の生まれた時期は井波大工の興隆期で、大工の家ではなかったが、幼少から建築に大きな関心をもっていたという。その後、江戸にのぼり、初代のもとに弟子入りし、堂宮大工として腕を鍛えられた。清水の入り婿となり、初代の長女と結婚。清水組がいちはやく進出していた横浜店を担当。その後、幕府から外国人旅館（築地ホテル館）の建築を請負い、日本人最初のホテル経営者となった。



旧・県会議事堂（明治42年完成）



旧・富山県庁（明治33年完成）

「ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 富山」（㈱国書刊行会　八尾正治編）

滝廉太郎の従兄・滝大吉と県会議事堂、浅草十二階

滝廉太郎の父・吉弘は、日出藩（大分県）の大参事を務め、明治5年に単身上京。明治7年に妻子を呼び寄せた。滝大吉は吉弘の兄・吉彰の子だが、吉彰が27歳の若さで没したので、吉弘が滝家を継ぐとともに大吉を引き取り養育していたので、大吉も東京へ移り住んだ。吉弘は大蔵省勤務のあと、内務省に転じ、大久保利通や伊藤博文のもとで10年近く中央の官吏として働いたあと、地方官吏に転出した。最初が明治15年の神奈川県少書記官（廉太郎３歳）で、次が明治19年の富山県書記官（廉太郎7歳）、明治22年に大分に戻り大分郡と直入郡の各郡長を歴任した。

明治16年、大吉は工部大学校造家学科（現・東大工学部）を卒業し、警視庁御用掛の後、太政官会計局勤務となり、政府お雇いの建築技師コンドルのもとで助手を務めながら、建築家としての道を歩み始めた。

吉弘が明治20年12月に富山県上新川郡議事堂の落成式に臨んでいるが、その時、大吉も関係者の一人として出席していたと「瀧廉太郎」の著者・松本正氏は推測する。1月早く富山城内に竣工した県会議事堂（明治42年のものとは異なる）とともに、この上新川郡議事堂を大吉が設計・監督したというのが理由である。富山で２つの公共建築物に関わったのは、吉弘が県の書記官をしていた関係からとみられる。当時、大吉は、官を辞し、帝国工業会社で建築部長に昇任したばかりだったという。

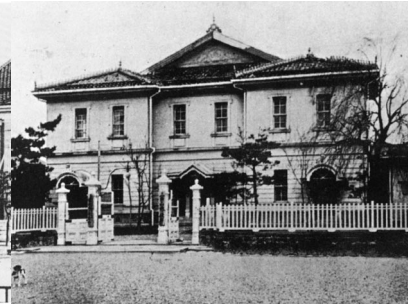
明治23年に完成した「浅草十二階凌雲閣」（日本における高層建築物の先駆け。日本初の電動式エレベーターを設置。ただし、故障が多く、翌年には使用中止に。浅草のランドマークとなり、啄木や白秋の詩歌や文学作品にも登場。大正12年の震災で8階から上が崩壊し、危険なため工兵隊により爆破された。）は、英国からのお雇い外国人・ウィリアム・K・バルトンの設計で大吉が監督施工を行った。なお、バルトンは、上下水道事業推進のための人的基盤の礎石となった人で、陣頭に立って主要都市の上下水道の設計計画や工事の指導に当たった。上水道に関しては細菌汚染阻止への厳格な姿勢を持ち、下水道に関しても、雨水に汚水を混ぜると全体が汚水に変わるという妥協を許さない汚染防止の姿勢がみられた。

明治27年、滝廉太郎は、大分・竹田の高等小学校を卒業後、音楽の道を志して上京しているが、その時、大吉の家に寄宿している。その頃には、大吉は陸軍省の技師として、忙しい中にも陸軍の建築構造の基本を確立し、西洋建築学書としては最初の「建築構造法」という書物を著わしている。明治32年には、辰野金吾会長のもと、妻木頼黄とともに、建築学会の副会長も務めている。ちなみに、大吉は、明治19年に親友の河合浩蔵とともに造家学会（現在の㈳日本建築学会）の設立を推進している。河合は、ドイツ人建築家ヘルマン・エンデとヴィルヘルム・ベックマンの基本設計をもとに中央合同庁舎第６号館赤れんが棟（法務省旧本館、旧司法省）の実施設計・工事監理を担当した人物として知られる。

大吉は、明治35年11月、脳溢血のため突然亡くなった。42歳だった。廉太郎は、明治33年に「荒城の月」などを作曲後、翌年、ドイツに留学するが、病を患い、35年に大吉らに迎えられて帰国しているが、それが心労となったのだろうか？廉太郎はその後、大分の両親のもとに戻り36年6月に帰らぬ人となった。23歳だった。この年、廉太郎が遊んだ神通川に馳越線をつくる工事が完成している。

サクラパックス(株)

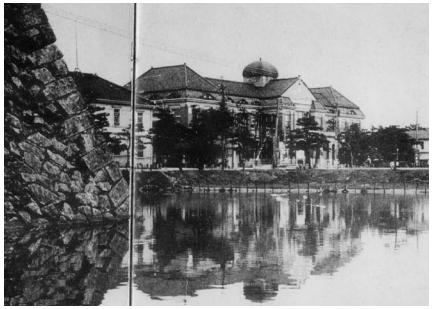
旧・富山市役所（大正9年完成）



旧・富山市役所（明治25年完成）

「ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 富山」（㈱国書刊行会　八尾正治編）

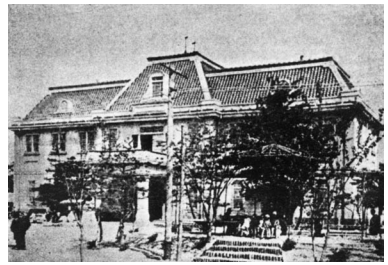
業を支えた工部省に工学寮が設置され、１８７３年には大学が置かれ、１８７７年には工部大学校に改称されたが、同年、造家学教師として、ロンドン出身のジョサイア・コンドルが着任。辰野金吾、曽禰達蔵、片山東熊ら創世記の日本人建築家を育成し、建築界の基礎を築いた。（工部大学校は、現在の東京大学工学部となっている）



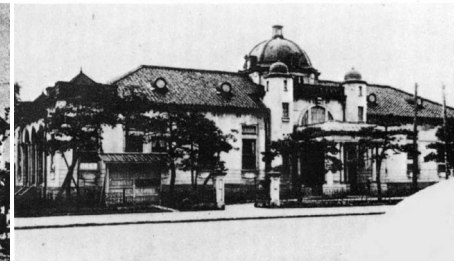
上の写真を別の角度から見たもの
「写真が語る激動のふるさと一世紀　目で見る富山市の100年」（郷土出版社　高井進監修）

１８８０年（明治13年）から３年がかりで建てられた鹿鳴館は、コンドルの設計であった（１９４０年に取り壊された）。この他、ニコライ堂（ギリシア正教の聖堂。関東大震災で被災し、現在の建物は岡田信一郎の設計で再建されたもの）や、東京丸の内最初のオフィスビルである三菱一号館、岩崎久彌邸（三菱財閥の創始者の長男で三代目総帥）、綱町三井倶楽部なども彼の設計である。

辰野金吾は、唐津（佐賀県）藩士の次男として生まれ、工部省工学寮に第1回生として入学。２年修了後、造船から造家（建築）に転じ、同科を首席で卒業。英国に留学し、コンドルの師のバージェスの事務所やロンドン大学で学び帰国。工部大学校の教授となった。造家学会（現在の㈳日本建築学会）を設立している。帝国大学工科大学学長



富山物産陳列館（大正4年完成）　富山市で作られる各種の商品が展示即売され、産物の紹介に大きな役割を果たした。



旧・富山市立図書館（大正元年完成）　大正2年（1913年）秋に堀川村の女子師範学校敷地（現・富山いずみ高校）で開催された一府八県連合共進会（博覧会）で参考館として利用された。

「ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 富山」（㈱国書刊行会　八尾正治編）

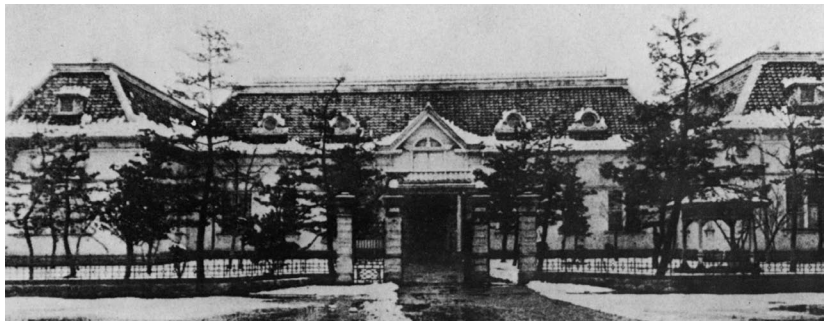
の後、大学を辞め、葛西萬司や片岡安と事務所を開設した。日本銀行本店や東京駅を設計したことで知られる。赤煉瓦に白い石を帯状にめぐらせるデザインを得意とし、「辰野式」と称される。高岡の山町筋にある富山銀行本店は、辰野金吾監修のもと、清水組（現在の清水建設㈱）の田辺淳吉が設計した。田辺は、大正時代建築の名手といわれている。

曽禰達蔵は、唐津藩の祐筆（書記）の子として江戸に生まれた。丸の内三菱オフィス街の基礎を築いた人物で、のちに後輩の中條精一郎とともに設計事務所を開設し、都心を飾る多くのオフィスビルを設計した。

片山東熊は、長州藩（山口県）の藩士の家に生まれ、奇兵隊に入隊し、戊辰戦争で戦った経験を持つ。辰野、曽禰らと同期。宮内省で、東宮御所（のち、赤坂離宮。現在の迎賓館）の設計など宮廷建築に多く関わった。東宮御所は、明宮（はるのみや）殿下（のちの大正天皇）の皇太子時代の住居として計画された。日本の建築界が明治を通じて学習してきた西洋建築の総決算と言われる。これが完成した時、当時の建築家たちはやっと西欧の建築家に追いついたと思うことができたという。

ルーブル宮東正面やヴェルサイユ宮を手本とし、ヨーロッパに負けない宮殿として、構造、規模、設備、装飾の全てにおいて一流を目指し、設計に2年半、工事に9年をかけて完成した。片山は、京都博物館の設計でも知られている。

明治以来の様式建築習熟の歴史におけるひとつの頂点といわれるのが明治生命館である。東京帝国大学工科大学建築学科で辰野金吾に学び、東京美術学校（現在の東京



県立富山薬学専門学校（明治43年完成）
「ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 富山」（㈱国書刊行会　八尾正治編）

芸術大学の前身）、早稲田大学で教鞭をとった岡田信一郎の設計による。彼は伝統的な日本建築に対する造詣も深く、研究者であった一方で、西洋建築の様式に通じ、本格的な西洋の様式建築と共に、西洋と日本の融合や、日本建築の近代化をはかった作品を送り出した。

富山の洋風建築

富山県の状況をみると、先の富山銀行が辰野金吾監修であるのと、旧・富山市立図書館も辰野の設計と言われる。これは、今の富山国際会議場のあたりにあったようで、昭和20年の富山大空襲で焼失している。「ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 富山」によると、型式はセセッション式（Secession　ウィーン分離派）であった。これは田辺淳吉が明治42、43年に欧米を視察した時、新し

東京駅、丸の内最初のオフィスビルに復元計画

赤レンガの東京駅は、辰野金吾が設計し大正3年に創建された建物。1945年、空襲を受け、壁を残して焼失した。戦後修復されたが、3階建てが2階建てとなり、南北２つのドームもシンプルな三角屋根として復興された。現在、2011年度末の完成を目指し、復元計画が進められており、昔の図面どおり、3階部分とドームが復元される予定だ。

また、東京丸の内最初のオフィスビル、赤レンガの「三菱一号館」も復元される予定だ。東京駅前にあった丸の内煉瓦街は、ジョサイア・コンドルが設計、指導、監修を行い、ロンドンのロンバードをならったビジネス街にすべく作られた街。当時は、街路樹として植えられた銀杏並木に赤煉瓦が見事に調和していたという。

い建築界の潮流となっていて強い影響を受けた型式であることから、あるいはこの建物も富山銀行同様設計に携わっていたのかもしれない。

お隣り、金沢の洋風建築として有名なのは、広坂にある石川近代文学館（旧第四高等中学校本館）である。山口半六が設計し、明治24年に竣工した本格的な煉瓦作りの建物で、戦後は金沢大学理学部として昭和43年まで使用された。山口半六は、明治35年に竣工した近世フランスルネッサンス様式の代表的作品・兵庫県庁舎（現在の兵庫県公館）の設計者としても知られる。また、明治23年に建てられた旧・東京音楽学校（現・東京芸術大学）の講堂兼音楽ホールとして建てられた奏楽堂の設計にもかかわっている。2階ホールは、滝廉太郎がピアノを弾き、山田耕筰が歌曲を歌い、三浦環がデビューを飾った由緒ある舞台である。

日本の近代建築を5つに区分

さて、竺覚暁（ちくかくぎょう）氏（金沢工業大学教授）によると、日本の近代建築は一般に次の5つに区分されるという。（県民カレッジテレビ放送講座ホームページより　平成10年度第6回）

①西洋館建築…西洋諸国の外交官や宣教師、教師、商人などが自らの設計で、主として自らの住宅として建てたもの。県内では、日本基督教団魚津教会（今は現存しない）。

②擬洋風建築…「文明開化」により全国で起こった西洋建築建設の要求に地元の大工が応えて創られたもの。横浜や神戸の外国人居留地や東京に建てられていた西洋館建築を見学に行き、その形態を自らの伝統的和洋建築技術でコピーした。県内では旧福光町の福祉の家「光龍館」（旧・西勝医院）、高岡市の井波屋仏壇店（旧・林屋茶舗）、チューリップ公園内の砺波市立砺波郷土資料館（旧・中越銀行本店を移転。土蔵造りと西洋建築の融合。宮内庁技師だったと言われる長岡平三と井波の宮大工で名棟梁と言われた藤井助之丞が設計）などがある。

③折衷主義建築…明治日本が西洋建築を学び始めた時のヨーロッパは、過去の様々な建築デザイン、ギリシア・ローマの古典建築、ロマネスクやゴシックの中世建築、ルネッサンスやバロックの近世建築などの様式を創ろうとする建築の目的に応じて選択し、折衷してデザインする「折衷主義建築」の時代だった。政府が招いた外国人教師に学び、あるいは、西洋の学校に留学し、本格的な西洋建築を学んだ建築家による日本の本格的な西洋建築がこれに入る。高岡市の富山銀行本店は県内に残る唯一の本格西洋建築だ。この他、福野高校厳浄閣（藤井助之丞が設計）、滑川市の高橋医院、新湊市の牧田組、東洋紡績井波工場事務所などがあるそうだ。

④モダニズム建築…ヨーロッパで「折衷主義」に対する批判が高まり、合理的で自由、機能的かつヒューマニズムに基づく新しいデザインが1920年代に創造され始めた。鉄とガラス、コンクリートがこの近代デザインを可能にした。旧庄川町の木村産業が県内における鉄筋コンクリート造の極めて早い例だ。が、何と言っても富山のモダニズムの幕開けは神通川廃川地の開発とそこに建てられた富山県庁（昭和10年〈1935年〉竣工、大熊喜邦設計）だと竺氏は述べる。

また、県庁竣工の翌年に建てられた富山電気ビルディング（富永譲吉設計）も全体的には抽象的なモダニズム・デザインである。

⑤近代和風建築…公的な建築は西洋建築であっても私的な面の建築は長く和風建築で建てられた。高岡山町筋の菅野家（明治34年頃）は藩政期の「まちや」の完成された造形に西洋の思想や技術を導入した富山の近代和風建築の傑作とされる。GL

【参考文献】「ふるさとの想い出　写真集　明治大正昭和　富山」（国書刊行会　八尾正治編）、「写真が語る激動のふるさと一世紀　目で見る　富山市の100年」（郷土出版社　高井進監修）、「職人たちの西洋建築」（講談社選書メチエ　初田亨著）、「明治・大正期　富山県の建築」（㈳富山県建築士会）、「大分県先哲叢書　瀧廉太郎」（大分県教育委員会　安永武一郎監修・松本正著）、「日本の名景洋館」（光村推古書院　高井潔著）、「西洋館　明治・大正の建築散歩」（淡交社　中村哲夫著）、「明治の建築」（本の友社　桐敷真次郎著）、「滝廉太郎伝」（大空社　宮瀬睦夫著）、「浅草十二階」（青土社　細馬宏通著）、「国土を創った土木技術者たち」（鹿島出版会　国土政策機構編）、清水建設ホームページ、三菱地所ホームページ、Wikipedia、他

富山県庁を設計した大熊喜邦と国会議事堂

大熊喜邦は、東京帝国大学建築学科卒業後、辰野金吾と並ぶ建築界の大ボスだった妻木頼黄のいる大蔵省臨時建築局（議院〈国会議事堂〉建設のための組織）へ入った。ちなみに、妻木は、辰野の後輩でコンドルに学んでいるが、中途退学してアメリカ留学。帰国後、東京府に勤務後、臨時建築局に務め、議院研究のためドイツに留学、1888年（明治21年）に帰国。が、一時、本格的な議院建築は見送られる。日露戦争後再び議院建築の機運が盛り上がった時、辰野らから公開コンペ開催の要求が起こり、設計を進めていた妻木らを批判するがこれを退ける。しかし、その後計画は延期となり、官位を辞任。1916年（大正5年）に逝去。辰野はコンペ開催を決定し、1919年、応募118点の中から第一次審査をする途中で亡くなった。その後、第2次審査で1等となった宮内技手の渡辺福三の案を妻木の右腕だった矢橋賢吉（旧石川県庁の設計者でもある）らが修正。大熊は矢橋の部下としてサポートする。昭和2年の上棟式のあとしばらくして矢橋がなくなると、大熊が後任として工務部長となり、昭和11年の完成まで導いた。（下記に参考にしたリンク）

「東京の近代建築」　http://members.aol.com/nk10jo/kiko1/tokin/tokin11.html

「建築家矢橋賢吉とその作品について」　http://white.freespace.jp/layla/yabashi-02.html